

Title	一九九二年度 三田史学会大会プログラム；一九九一年度修士論文要旨； 一九九一年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1993
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.62, No.3 (1993. 1) ,p.159(371)- 168(380)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19930100-0159">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19930100-0159</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九九二年度 三田史学会大会プログラム (一九九二年六月二七日、慶應義塾大学三田校舎にて)

研究発表

日本史部会

- 1 関東における観応擾乱と薩埵山体制の成立 東京都立大学 (大学院博士課程) 磯崎 達朗
- 2 中近世移行期における堺勸進 慶応義塾大学 (大学院修士課程) 古川 元也
- 3 幕末における「外圧」についての一考察 慶応義塾大学 (大学院修士課程) 松田 隆行
- 4 幕藩体制解体期における貿易市場の機能と構造 中央大学 (大学院博士課程) 小山 幸伸
- 5 近代都市の墓地と火葬場——十九世紀末の東京の場合—— 慶応義塾大学 (大学院博士課程) 日朝 秀宜
- 6 福島県滝根村出身ハワイ出稼・佐藤常蔵の周辺 慶応義塾大学 (大学院修士課程) 赤木 妙子
- 7 天草郡中田村出身ペルー移民とリマ市 慶応義塾大学文学部 柳田 利夫

東洋史部会

- 1 『ギターブ・アルリタビーフ』を通してみた十世紀バグダードの食文化 慶応義塾大学 (大学院修士課程) 鈴木貴久子
- 2 オスマン朝の土地制度の起源説をめぐって 慶応義塾大学 (大学院博士課程) 三沢 伸生
- 3 葬喪制よりみたる朝鮮の事大と主体 下関市立大学 古田 博司
- 4 宋明儒学と羅教 東海大学 浅井 紀

西洋史部会

- 1 シトー派修道院の所領経営・理念と現実——Villers 修道院の場合—— 慶応義塾大学 (大学院修士課程) 舟橋 倫子
- 2 アウグステイヌスの初期著作における受肉の教え 慶応義塾大学 (大学院博士課程) 鎌田伊知郎
- 3 十一世紀後期サフォークにおける荘園経営 広島大学 (大学院博士課程) 宮城 徹

4 書物と読書のアメリカ史——植民地時代から建国期まで——

就実短期大学

藤本 茂生

民族学・考古学部会

1 円筒印章における Presentation scene (いわゆる『紹介の場面』)

慶応義塾大学 (大学院修士課程)

菊地 知佳

2 アケメネス王墓の編年の再考

慶応義塾大学 (大学院修士課程)

石井 洋介

3 ポリネシアにおける先住民伝承

慶応義塾大学 (大学院修士課程)

三浦 直彦

4 集落の空間構成について——沖縄県宮古郡上野村・野原集落の場合——

慶応義塾大学 (大学院修士課程)

大熊 亨

5 縄文時代後期における土器の廃棄——茨城県上高津貝塚の層位的検討——

慶応義塾大学 (大学院修士課程)

大内 千年

6 横穴墓の地域性——多摩川下流域・鶴見川流域を例として——

慶応義塾大学 (大学院修士課程)

大西 雅也

7 九州の出土銭貨とパーソナルコンピュータによる資料整理法

九州帝京短期大学

桜木 晋一

市原 恵子

シンポジウム

テ — マ 文明語の比較社会史——漢文、オスマン語、中世ラテン語——

民族語を越える文明語とでも呼ぶべき言語が存在する。それらと民族語ないし地域的な諸言語のあいだに、機能や担い手など複雑な様相があり、それが社会相のある面をあらわしている。三つのケースについて比較検討したい。

司 会

慶応義塾大学文学部

坂本 勉

報 告

漢字文化圏の文字と生活

慶応義塾大学環境情報学部

金 文京

オスマン語をめぐって

東京大学東洋文化研究所

鈴木 董

西欧中世における民衆宗教運動と言語

慶応義塾大学文学部

坂口 昂吉

コメンテーター

神奈川大学短期大学部

網野 善彦

## 「律令制的国郡制と田図・戸籍制度」

井内 誠 司

大町健氏による新たな律令制的国郡制論の提起（『日本古代の国家と在地首長制』第一―三章、校倉書房、一九八六年）以後、八―十世紀の国郡制の再検討が進んでいるが、本稿では大きく三部構成をとり、近年の研究成果をふまえて律令制的国郡制の一端につき卑見を述べ、かつ平安期の問題についても論ずることとした。

大町説の主たる根拠は、日本令の戸令18造計帳条等における郡司等の機能を否定する形での唐令の改変であるが、先ず、「序論 近時の律令制的国郡制研究をめぐって」では、近年の律令制的国郡制に関する研究を整理した上で、かかる唐令の改変の解釈を中心に、大町説につき検討を加えた。その結果、(1)八世紀の造籍帳等の過程は、令文のあり方と整合せず、郡司は相対的に自立的な機能を有すると考えられること、(2)儀制令11遇本国司条、同18元日国司条も併せて検討するならば、日本令におけ

る郡司の機能の否定は国司に対して郡司を殊更に低く位置付けようとする、律令国家の抑圧的とも言える志向性によるものと考えられること、を論じ、大町氏の(1)八世紀の郡司の相対的自立性を否定する見解、(2)律令国家の郡司を官僚として編成する側面のみを捉える見解、に批判を加えた。

次に「本論 律令制的国郡制と田図・戸籍制度」では、土地相論、身分の帰属に関する訴訟の裁定において国司が中心的な役割を担っていることを指摘し、(1)その背景には基本的に国司が田図・戸籍を掌握する体制が考えられること、(2)序論で指摘した律令国家の郡司に対する志向性からすれば田図・戸籍制度は国司が郡司に対して拠って立つ、一定の効力を有する基盤としての側面を有すると考えられること、を論じた。

最後に「付論 九・十世紀の土地相論から見た国・郡衙」では、九世紀の土地相論の裁定では基本的に国司が中心的な役割を担うが、十世紀に入ると地種により国司が中心的な役割を担うものと郡司が中心的な役割を担うものが二分される、二元的体制へ転換することを論じ、(1)土地相論の事例を主たる根拠とする、従来の十世紀に入って国が郡の機能を否定・吸収するとの理解は根拠を

失うこと、(2)従来、十世紀に入って郡衙は衰退し、その行政的機能を喪失するとされてきたが、本稿での検証からすれば、その行政的機能はむしろ強化すると考えられ、かかる理解は再考を要すること、を論じた。

〔東洋史学専攻〕

「東晋朝における軍組織について

——軍権を中心とする比較研究——

野 島 正 宏

現代の世界情勢を考える上で、軍事に関するファクターが軽視できないことはいうまでもない。では、歴史研究上における軍事的要素とは、どの程度の重要性を持っているのであろうか。本稿は筆者のこのような問題意識から始まっている。

本稿のテーマは中国東晋時代における軍事組織について述べたものであり、次の内容から構成される。第一章では、軍事研究における普遍的な視角として、本稿でも論及すべき三点を提示した。具体的考証としては第二章

で、東晋朝の軍組織をその形態・機能面から兵士徴発、武官人事、軍編制などに分類して論じ、第三章では、前章で当代の特徴的組織として挙げた地方軍府の運用例として東晋初期の王敦、中期の桓温という二個人を取り上げ、その履歴、人脈、軍事行動例を比較考察している。

その結果から、当代の軍事史が中国史上の他の時代と比べてユニークな点を二つ指摘している。一点は、中央の権威と地方レベルでの実権力が極端に乖離していた事実である。それは、実権はないものの尊く奉られている中央権力の存在という点で、一面日本の戦国期を思わせるものがある。これに類する状況は、前代には東周などの例があるものの、中央集権の実質的進展が進む後代には見られなくなる。

もう一点は中国史において、軍事の実態とそれに対する同時代人の考え方が、この時代を境に乖離し始めているのではないかという認識である。権力の発現として最もストレートな形態である軍事力という素朴な認識が、この時代以後の中国においては、むしろ意識的に否定されるようになる。いわゆる文官優位の原則は当代から始まるのであって、前代には見られないものと考えている。本稿では筆者の力不足もあって、堅実な事実考証と結

論の間には、まさに少なからぬ飛躍や乖離が存在するのであるが、この距離を縮めるためには、時代と地域の枠を拡げた上で、この視点に基づいた資料の読み換えと実証を継続することが必要であろう。

## 「唐宋変革期における宗族の変容について」

松田恒尚

族田、祠堂などの族産、整備された族譜を持つことに特徴づけられるような宗族の起源が、北宋の范氏義荘に求められることは、中国前近代史の定説となっている。本稿の意図は、范氏義荘をそれ以前の歴史的潮流の中に位置づけることにより、いわゆる唐宋変革期における宗族の変容を跡づけることである。

同族を結集しようという意志は、唐代後半における士人層の社会的経済的動揺を背景とした「清儉」という心的態度の後退、家産経営への関心の高まりの中、家廟の建設のような形で発露していた。そうした中同族への散施も有力者の交際範囲における一代限りのな性格（個人的性格）を払拭し、有力者との親疎の別なく同族という

観念にもとづき継続的な性格（団体的性格）を強めつつあった。

こうした団体的性格の強化は范氏義荘における団体的土地所有に到達し、その後も義学の創設のように漸次進行してゆくが、設立当初の范氏義荘では族約である義荘規矩の授与が有力者に独占されていた。

また、義荘団体内部の人間関係における「仲間主義」とは、従来言われてきたような族人の対等を基調とする原理と理解することはできず、義荘を同族に施与する有力者の意志にもとづき、団体の秩序維持のために族人を規制する原理を考えるべきものであった。

このように見てくると、同族を再結集しようという意志は、族人全体に共有されている意志というよりも、むしろ同族の再結集を目論む有力者と外部社会との関係によって喚起されているように思われる。本稿の考察より、宗族の変容は士人と郷里社会、あるいは士人と上級権力との関係における何らかの変化を背景としてもたらされたという展望が得られる。

「一五—一六世紀のマグリブの聖者について」

武藤 亜子

一五—一六世紀のモロッコには、支配者と民衆の仲介役を果たす人々がいた。彼らは「聖者」、「スーフイー」または「ウラマー」と呼ばれた。彼らについては多くの史料が残っているし、研究も多い。しかし、史料の著者の立場を考慮した分析や、「聖者」・「スーフイー」・「ウラマー」といった語の重なりについてはまだまだ研究の余地がある。本論では、二冊の史料を用いてこの二点について考察した。二冊の史料は Ibn 'Askar の *Dawha al-nāshir li-mahāsini man kāma bi-al-Maghrib min mashā'ih al-qarn al-'ashir* (以後 *Dawha*) 及び Ibn al-Qādi の *Durra al-hijāl fi asmā' al-rijāl* (以後 *Durra*) である。

第一章の「言葉の問題」では、「聖者」と「スーフイー」と「ウラマー」の重なりについて考えた。「聖者」と「スーフイー」、及び「スーフイー」と「ウラマー」に重なる部分があることは、様々な研究から解っている。しかし、「聖者」と「ウラマー」の重なりや三語の重なりに関する研究は見いだせなかった。第二章の「史料分析の前提」では、この時代と史料の著者について述べた。当時のモ

ロッコでは、禁欲を実践する「スーフイー」から、「聖者」に対して人望が集まるようになったという。二人は共にスルタンの側近であったが、生きた時代がわずかながらずれているため、両史料も異なった趣を呈している。第三章の「両著者が記した人々」では、史料の記述からいくつかの情報を選び、そこから両史料の性格を分析した。*Dawha*には主に「聖者」、*Durra*には主に「ウラマー」が記されていた。一方、両史料に共通する人々の分析から、両史料は同じ人物の聖者的側面とウラマー的側面が記されたと考えられた。第四章の「人間関係」では「聖者」・「ウラマー」のスルタンや民衆との関係、また彼ら同士の関係について考えた。*Dawha*ではスルタンに敵対する人々も記されているが、*Durra*ではそのような人はいないことが解った。

第五章の「結論」では上記の分析を踏まえ、戦乱の時代にはスルタンに匹敵する力をもつ「聖者」の出現が待望され、平和な時代にはスルタンに協力する「ウラマー」の勢力が大きくなることを述べた。また、このように述べると対立する階層のように思われる「聖者」と「ウラマー」も、ほぼ重なるのではないかということも併せて述べ、結論とした。

一九九一年度卒業論文題目

〔国史学専攻〕

大后に関する一考察

岸 亜矢子

論説柿本人麻呂

椿 隆雄

紀寺の奴——紀寺奴益人等は何故に従良されたか——

安倍 弘樹

天平十一年出雲国大税賑給歴名帳記載地域についての一考察

大野 陽太

女帝論再考——その登場と終焉をめぐって——

小谷 英子

古代天皇の即位儀に関する一考察

斉藤 瑞木

『続日本紀』宣命について

鳥海 芳一

安芸有力国人と毛利氏

菅生 健一

鎌倉幕府がやってきた

——陸奥国掌握過程に関する基礎的研究——

七海 雅人

室町時代中期における幕府財政と伊勢氏

原 麗子

戦国大名武田氏と小山田氏・穴山氏との関係について

吉沢 浩孝

南山御蔵入領五万石騒動

饗庭 孝昌

近世江戸に於ける瓦版の流通意義——知と遊の両極性——

岩崎裕美子

江戸周辺農村の治水・水利秩序と「領」

——武蔵国東葛西領を事例に——

伊藤 明

江戸火消制度過程と町火消の構造について

江戸に於ける塵芥処理機構の成立

川本百合子

信州における塩の道について

小林 一英

徳川時代の人売買と年季に関する法令について

佐竹 和子

江戸時代における義経生存伝説の発展について

宍戸 択弥

近世近江商人の活躍

高橋 英俊

江戸穢多集落立地についての一考察

竹本 桂子

伊勢参宮

辻本 靖弘

伊能忠敬の日本地図作成の舞台裏

長沼 由佳

幕末水戸藩における尊皇攘夷運動の展開

根本 英一

——戊午密勅を巡る抗争について——

江戸町人と飲食店

坂 正輝

——江戸「外食」史研究の一試論として——

伊達政宗と文禄・慶長の役

藤光 佳子

日英平戸貿易の研究——松浦氏との関係を中心に——

保坂 綾子

イギリス軍の横浜駐屯について

松永 直子

坂本龍馬の政権構想

伊藤 敦彦

近代化の精神と武士道

土橋 晃一

口供書から見た竹橋事件蜂起の起因

中村 浩

赤木 聡

帰国後における近世漂流民達の処遇

相沢 明夫

衣料品産業からみたニューヨーク・チャイナタウン 足立 桜子

昭和戦前期における政治経済思想の諸潮流

佐藤 晋

「海賊」と「奴隷」——十八、九世紀のスーロー王国との関係——

河上肇研究——経済と道徳をめぐって——

関根 博

水野亜砂子

GHQの教育改革と日本側の対応

岡本 義央

黄金栄考——特に包探との関連において——

村田 茂

老朽司法官刷新問題の歴史的意義

清水 弘行

日本帝国主義下の朝鮮植民地

小松原正浩

賀川豊彦のセツルメント運動

大里 知子

——日本窒素肥料株式会社を通して——

柳川うらら

——本所基督教産業青年会を中心として——

佐々木晶子

中国における城隍廟信仰について

山岡 公樹

台湾統治における同化政策の意義について

佐々木晶子

近代都市上海の形成に対して果たした人力車の役割について

借家人同盟と大正デモクラシー

佐藤 圭子

私論・山田寅次郎——日土関係史の側面——

萩島 典孝

——民衆による大正デモクラシーに関する一考察——

中林 潤一

クルデイスタンの少数民族問題

林 陽子

近衛文麿と新体制運動——近衛の目指した政治新体制——

中山 章子

——シヤイフルオペイドウツラーの反乱をめぐる  
クルド人を中心に——

戦時下における石橋湛山の「小日本主義」

小林 幹典

小アルメニア王国——その国家的アイデンティティの行方

松坂 華子

浦島伝説成立私考

永井 択

「西洋」におけるミクロコスモスとマクロコスモス

室賀 秀朋

中国古代理の医師たち——その評価から見た社会背景——

高橋智太郎

——鍊金術とイフワーン・アル・サファーを中心に——

中国古代理兵制考

米沢 直樹

イスタンブルの Bedesten

漢代前期に於ける終止五徳説の「転回」

安酸 誠司

中世イスラム社会における「ゲーム」と「賭け事」 黒岩今日子

アメリカ華僑とその職業変遷

山本 智一

第一次世界大戦前のパレスチナへの

近江 志乃

近江 志乃

第一次世界大戦前のパレスチナへの

近江 志乃

近江 志乃

第一次世界大戦前のパレスチナへの

近江 志乃

近江 志乃

第一次世界大戦前のパレスチナへの

近江 志乃

近江 志乃

第一次世界大戦前のパレスチナへの

ユダヤ移民が与えたアラブへの影響

小阪 裕久

近代的思考と科学成立の関係

祓川 圭介

十九世紀エジプトの教育改革とワクフ制度

志田 綾子

ポーロニヤ大学成立について

南出 育史

——アラー・ムバラクの教育改革を中心に——

志田 綾子

十二・三世紀における異端運動について

高石 真美

タゴールと野口米次郎——一九三八年以降の二人の軌跡——

松尾あさ子

イエスの復活をめぐる史的考察

小松 寛人

松尾あさ子

ルターの義認論形成について

犬飼 史子

ユダヤ人迫害とナチズム

浅田 貢

アパルトヘイトの要因

鈴木 康弘

ユダヤ民族とシオニズムの矛盾

小田垣寿美子

バナナ・エンパイア——バナナプランテーションを通しての

小林 健雄

ナチズムの魅力についての考察

柴田ウエンディ

アメリカ多国籍企業の中米支配——

小林 健雄

——民衆は何故ナチスを支持したのか——

柴田ウエンディ

アデナウアーのヨーロッパ統合構想

田口 芳竹

モロッコ事件における諸要因の究明

高川 知子

第二次大戦後のアメリカにおける自由主義と保守主義の角逐

田口 芳竹

西ドイツの東方政策

竹田津知子

中原 唯史

禁酒法とその時代

田村 公一

アジェンデ政権の崩壊に見るアメリカの影響

広瀬 努

ユーゴスラヴィアのナシヨナリズム

春田 典子

第二次大戦後のドイツ社民党と外交路線の転換

内山 覚

メアリ・ウルストンクラフトとフェミニズム思想

横山 佐知

カルタゴ衰亡の原因について

斎藤 竜哉

第三帝国における人種政策とヒトラー

渡辺 郁男

イタリア・ルネサンスにおける女性の地位

秋尾 百合

イギリス自由貿易主義とインド

山本 直人

中世ヨーロッパにおけるユダヤ人の地位

宮下 和子

——当該期鉄道政策を通しての検討——

山本 直人

ニコンの改革をめぐる

高山万貴子

近世イングランド都市の基調と変容

東野謙次郎

聖像破壊運動の歴史的意義

渡邊 聡

スペイン新大陸征服期における精神的側面からの考察

溝口 稔和

中世におけるアリストテレスの受容

木田 智久

溝口 稔和

近世におけるポーランドの衰退の諸原因に関する考察

及川 澄

イギリス東インド会社

新川 和紀

フランス絶対王政開花への道のり——二人の宰相の遺産——

鈴木絵里子

フランス革命期のパリ民衆騒乱についての一考察

藤村 仁志

十八世紀におけるフランスのサロンとその特質  
ジェントルマン層がイギリスの工業化に果たした役割

白石 道子  
土井 由紀

「民族学考古学専攻」  
婚姻制度と女性の地位

——今昔物語に描かれる女性観を中心に——

貝田 尚重

西欧における活字文化の成立——その経過と歴史的意義——

由井浜陽子

クレタ美術における装飾文様  
タイにおける華僑の同化過程

秋田阿仁地方における生業の変遷とマタギ習俗

——根ノ子・打当部落から

渡辺 妙美  
天野 暁彦

日本の環境運動とナショナル・トラスト  
ブリュニング内閣の歴史的評価  
一九三〇年代の日英関係

阿部 泰久  
大野木 一夫

長江下流域新石器時代稲作農業の展開  
——農耕具の検討を中心として——

御田 幸司  
大宮 耕一

エリザベス一世治世期のパトロネジについて  
ピューリタンの政治団体契約

河村 悦子  
田中由美子

ニュージーランド先史時代における堡塞遺跡と  
農耕の関係について

西オーストラリア・ブームにおける真珠貝採取業  
——インタビュにもとづくケーススタディー——

高塚 新

高橋 芳男  
高部 義之

イギリスと欧州協同体の関係  
改革者トロツキー

萩原 孝浩

森林伐採による狩猟民ペナン族社会の変化

——イギリスEEC加盟問題を中心に——

石黒 哲也

前山 剛  
富井 昭博

T・E・ロレンスのアラブ人観

井上 知子  
田中裕美子

ユーカーラの成立とその背景

頁岩製石器の光沢痕について

渡辺 香  
岡沢 祥子